

うしないし、こころ模様

著者	佐賀枝 夏文
雑誌名	真実心
号	19
ページ	63-91
発行年	1998-03-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000551/

うしないし、こころ模様

佐賀枝夏文

はじめに

みなさん、こんにちは。今日は僕が人生という道を歩いてきた体験や感じたことを少しお話しして、その中で何か伝えられたら、そして、心が伝わったらいなと思います。僕は社会福祉の授業を担当していますが、カウンセラーもしています。相談室でサガエと書いたら、サザエさんと呼んでくださる方がいたので、サザエさんのカウンセリング室と言っています。もし、覚えていただいたらサザエさんでいいです。今からお話しする話は、みなさんにとっては、ずいぶん遠い心の話だと思います。それは僕の世界の話なのかもしれませんが、みなさんは持

って帰る必要はありませんが、少しの時間お付き合ひ下さい。

一 わたしの喪失体験から

僕はずいぶん早いうちに、五歳の時ですが、父親と死別しました。生まれたのは富山県魚津市の小さなお寺です。小学校二年生の時に魚津市に大火があつてお寺が焼けてしまいました。それを機会に母親が高岡という町に出ていきました。僕は五歳の時に父親と死別して、八歳の時に母親は寺に僕をおいて出て行ってしまいました。今こうして演台の上で心臓がドキドキしている僕との関係がそこにあるような気がするのです。僕はとっても神経質です。先程、お参りしてみなさんに後ろを向けた時、髪の毛が薄かったの、わかりました？ 年齢は四十九歳です。それから禿げても不思議はないのですが、この禿は小児神経症という子供のノイローゼで、円形脱毛症になったためなのです。頭のとっぺんが禿げて、後ろが禿げて、耳のところが禿げました。なぜ、小児神経症になったかという点、母親が僕をおいて行ってしまったので、母親が恋しくて禿げはじめたのです。

うしないし、こころ模様

田舎のお医者さんで名医と言われる方に、僕の円形脱毛症を診てもらったのです。ところが、僕のようなカウンセラーがいたら「ギョッとだっこしてあげてよ」と言ったかもしれないですけど、その名医といわれるお医者さんは「女性ホルモンが足りないから禿げたんだよ」と、毎日僕の頭に女性ホルモンを注射しました。そして、大事な毛根を死滅させてしまいました。だから、僕のは二次的な禿なんです。僕はつい最近まで髪の毛を伸ばしていました。人にそれを見られたくなかったからです。最近、短くして、「もういいか、僕の人生だし、ウソじゃない人生だし、禿たこともウソじゃないよね」と自分に言って、歩く時に、「うん、いいや」となりました。

でも小学生の時は、この禿頭のために、ずいぶんいじめられたりしました。小学校低学年の時に、僕の禿を背の高い子が「触ってごらん、気持ちいいよ」と触るのです。嫌で嫌で仕方ありませんでした。「五円禿」と言われたりもしました。いろんな子が僕の禿を触って成長しました。僕は自分の禿を自分で触れるようになったのはごく最近です。皆が気持ちいいと言った禿に自分で手を伸ばしてみても、こんなにも気持ちがいいのかと思えたのが、長い会議の時でした。退屈しのぎに触ってみると気持ちのいいものだなと思いました。

それでもやっぱり、とても神経質な僕は、いまでもドキドキして、初めての人の前が上がってしまっし、話ができるだろうか、失敗しないだろうかいつも心配します。テストの時には、他の人以上にドキドキします。何が原因でそうなのかを考えてみて、行き着いたところが、早く父親が亡くなってしまい、母親がある時、出ていってしまい、そのことを言葉でなく、心で感じ、理解したのが、「生まれてきてよかったのかな」という思いでした。

僕は、親の役割は、怒りながらも、「生まれてきてよかったね」とギュッと抱きしめることだと思えます。僕には、そういう体験がないのだと思います。いつも僕は生まれてきてよかったのかなということを四十九歳になってもいまだに思っています。新しい人と会うと、「本当に僕でいいんですか」という問い方をしてしまいます。居場所を求めながら、ずっと約四十年間生きてきたような気がしません。

いま思うと、その僕が大学生の時に、所在なげに場所を探してうろろしていたような気がします。今でもそうですが、「佐賀枝さんでいいよ」と言ってもらいたくて仕方がないんです。僕でいいのかな。その時に、なかなか承認してもらえない。いいんですか。いい時もあるし、悪い時もあるんでしょうね。皆さんと僕の共通点、「あなたでよかったよ」と言われたと思

うしないし、こころ模様

いません。「あなたは生まれてきてよかったね、あなたと出会ってよかった。あなたでよかったのよ。あなたでなければいけないかったのよ」。そんなことをどこか心の中で思っていますか？ 僕はそうです。「生まれてきて本当によかったの？」ということの答えを探し求めるために生きてるようなことがあります。

その僕が、今、福祉を教え、カウンセラーをしています。素直な気持ちをいうと、そんな佐賀枝さんは別ものみたいな感じがします。そこで、僕はたまたま生きて歩いてきただけみたいな、自分の道すがら「福祉」でなければいけないかったし、「心理」でなければいけないことを少しお話します。僕以外の大学の先生は、しかるべき方向性を持って研究をされて、しかるべき研究者になられたのでしようが、僕は全然違います。僕にとっては福祉でなければいけなかったし、カウセンリングに出会わなければ生きてこれなかったのです。その中で今の自分が教壇に立っているのだなと思います。

二 タケさんとの出会い

僕は大谷大学を卒業して、その後、福祉の現場に出ました。それこそ今は福祉の時代みたい
に言われていますが、僕が福祉の現場に入った時は、「飯が食えないから福祉に入ったらだめ」
と言われていました。親戚のおじさんのところに行って「僕、福祉するんだ」と言うと、「自
殺しないように」と言われて、そんなものなのかなと思いました。福祉の仕事って、グラビア
に書いてあるようなものではないんだと思って福祉に入りました。どういう経路でという
仕事に入ったかは、またの機会にお話しします。

そこで今日は、僕がその時に出会った人の話をしてみたいと思います。リハビリテーション
センターで仕事をしていた時の話です。タケさんという人の話です。臨床や現場の話は、実名
を使つてはいけないので、名前を借ります。タケさんというのは「鳶のタケ」さんというあだ
名がありました。鳶職をしていたのです。イナセな人で角刈りでヤンチャな感じのお兄さんで
した。僕が三十五歳くらいの時にタケさんが四十四、五歳でした。

うしないし、こころ模様

僕が出会ったこのタケさんは、脳卒中中で四十二歳の頃に倒れて緊急入院したのでした。このように、人生の途中で障害者になった人を「中途障害者」といいます。脳卒中は、脳溢血と脳血栓という二つのタイプに分けられます。脳血栓は脳の血管が詰まって神経細胞が死滅して障害になります。脳溢血は脳の血管が破裂して神経細胞を死滅させて手や足がマヒします。メカニズムはシンプルで、脳卒中は大きく言って、血管が詰まるか出血して破裂するか二つです。四十歳を過ぎると成人病がそろそろ始まる時期です。五十歳、六十歳で倒れる人が一番多いのですが、タケさんは比較的早い時期に倒れた人でした。

脳神経というのは、交差して反対の運動領域を支配していますから、右の脳で出血すると左半身がマヒします。そして、マヒには二通りあります。回路に電流が流れすぎて緊張がきつくなるのと、回路に電流が流れないで風船みたいになる。タケさんは緊張がきつくなりまずから内側に内側に入っていく。足も内側になる。杖について歩いている状態でした。右の脳で出血したので、左片マヒです。利き手が右手ですから身体障害者手帳をもらう時には身障者二級の手帳でした。そんなタケさんが僕と出会った時は、病院でのリハビリテーションも済んで、そろそろ社会復帰で家に帰るか職場復帰するか、その中間地点でした。

リハビリテーションセンターは、お盆とお正月の時期は帰宅実習します。入所している方々はお盆とお正月は楽しみにしています。ところが、帰宅しなければならぬ時期になると、タケさんは、「佐賀枝さん、置いてくれへんかな。何でもするさかいに置いて」と僕に言ってくるのです。

このセンターへ入所するときは、みんな身ぐるみ剥がれてミカン箱一つで入ってきます。タケさんが持っているのはふだん着とジャージの上下と大好きな飴が一袋か二袋、小遣いが少しかったです。後はアルバム一冊と布団です。家に帰ればテレビもあるし、不自由ないと思って、「タケさん、家に帰りなさい」と言うのと「佐賀枝さん、置いてよ、置いてよ」と押し問答になって、「どうしてなの」と聞いたのです。

タケさんは次のように話してくれました。

タケさんが倒れた時は、日本が高度経済成長の真っ只中でした。ビルがどんどん建って、職業のタケさんには休みがないくらいでした。お父さんとお母さんは早くに亡くなっていて、お兄さんのところで一緒に仕事をしていました。タケさんが帰るところはお兄さん夫婦のところでした。倒れるまで、お兄さんと義理のお姉さんは「タケ、タケ」と可愛がってくれて、もう

うしないし、こころ模様

少ししたら蒞職の会社を起こそうかと大事にしてくれていたのです。

実は、お盆とかお正月にお兄さん夫婦のところへ帰ると、そこには中二階があつて、タケさんの生活場所は、その中二階の梯子を上がったところ、つまり物置なのです。組の若い衆に上げられて、そこが生活場所なのです。

ところが、冬はまだいいのだけど、夏は大変なんだよと、タケさんは話してきました。梯子ですから、マヒがあるから誰かの力を借りないと下りられないのです。義理の姉さんは朝、これ以上盛りきれないくらいのご飯を器に盛って、おかずを少し盛って、それから洗面器をその生活の場所に上げるのです。この洗面器は、それで用を足せというわけです。朝、三食の食事あげて、洗面器で用を足せというわけです。広くない物置の中二階で真夏の時に、「そこで生活しろというわけです。障害者になるまでは本当に姉さんも兄さんも可愛がつて、「飲みに行こうか」「もう少ししたら会社を起こして頑張ろうな」ということを話してくれたんだけど……。だから「佐賀枝さん、置いてよ」と言うわけです。

帰宅実習で帰りたくなかったタケさん。今から思うと、その頃のタケさんは、昔話ばかりしてました。蒞職で羽振りがよくて、景気もよくなって、飲みについて豪遊して、それはそれは楽

しい毎日だったと話すのです。そのタケさんは障害をもって生きている、「今」を全然見よう
としないのです。僕がその時点でわかったのは、タケさんは、三つのものの喪失を体験したの
だということでした。第一の喪失は、今まで自由に動いていた左半身を脳溢血でなくしたわけ
ですから、「からだの機能」をうしななったわけです。第二の喪失は「仕事」という仕事です。半身
マヒになったタケさんは、仕事を継続できませんでしたので「仕事」です。リハビリテーショ
ンが済んで、「俺に薦の仕事以外に何をせいというの？」と、僕に食ってかかったこともあり
ます。三番目に彼がうしななったのが、一番大事にしていた「人間関係」でした。タケさんと出
会ってから、十年ほど僕の心の中であたためて、そして今、彼がうしなってしまったものが何
であったのかを思う時に、自分の自由なからだをうししない、薦職という仕事をうししない、兄弟
という大事な人間関係までうしなってしまったということがわかりました。

センターで過ごしている時に、タケさんはよく夕日をぼうつと見ていました。「タケさん、
どうしたの」と尋ねると、「昔な、宗右衛門町でな、羽振りがよくなってな」と。昔のことばか
り見ているタケさん。今、僕はやっとわかるのです。大事なものをうしなった人は「今」が見
られないのです。今、自分が生きているそのところを見られないのです。後ろしか見えない。

うしないし、こころ模様

むかしの栄光しか見えないのです。人生の途中で障害を持った人は特にそうかなと思うのです。「諦め」、タケさんから僕が言葉として学んだことや、タケさんで印象に残った、表現する言葉として残ったのは「諦め」みたいなものです。今、もう一度思うと、タケさんは、諦めきれなかったような気がするのです。人生の半ば、これから会社を起こして、仕事を頑張って順風満帆で行こうとした、まさにこれからという時、彼が倒れて自分のからだの半身をうしない、職をうしない、一番大事にしていた兄さんとの人間関係をうしない、彼が今から生きていこうとする時、後ろしか見えなかったのです。彼は「今」を、生きていないのです。もう一度、タケさんに会ったら、「今を、生きようね」と言いたいと思います。

彼が常に見ていたのは過去です。夕日を見ていた彼は諦めきれなかったのです。障害者になると絶対越えられないところがあって、俺は越えられると思っても、健康な人でなければ越えて行けない。その中で、「もう俺の人生終わった。もう諦めている」ということを言いました。今、思うと、タケさんは諦めきれなかったのではないかと思えます。諦めきれなくて、次に踏み出せないのです。そんなところがタケさんとの出会いの中で印象に残っているところです。

三 クニさんとの出会い

最初に僕の喪失体験についてお話ししました。二番目がタケさんについてでした。三番目にクニさんという人の喪失体験についてお話ししたいと思います。

クニさんはタクシーの運転手をしていました。深夜にお客さんを家まで送って行って、その玄関先でバタッと倒れたのです。彼はタケさんより年齢が高かったと思います。五十歳頃でした。お客さんが電話をして救急病院に入院して、彼も左片マヒです。左手左足がマヒしてしまふ。年齢が高くなればなるほど残存機能が弱いので、車椅子の使用と並行するような感じでした。頭に白髪が混じっていました。タケさんはこざれいにしていて、イナセなタケさんという感じがありました。クニさんは身繕いをせず、手が硬直して動かしづらいので爪を切るのも大変でした。爪を切ったりしてあげるのですが、自分からは切ってほしいと言わないのです。大丈夫だからと。だんだん爪が食い込んでいって痛々しいのです。マヒしているところを洗えないので、角質化していって、さらに痛々しい印象が強いです。車椅子に乗っているので、

うしないし、こころ模様

タケさんよりちょっと元気がない感じですよ。

センターでは、リハビリテーションの時間や社会復帰のための作業療法の時間もあるのですが、クニさんは一生懸命働まない人なのです。それを僕はよくわかっていました。「クニさん、どう？」と言ったら「先生様、先生様、ここへ来てよかったですわ」という言い方をするのです。僕は先生と呼ばれるのは嫌いなんです。「ここのご飯はおいしいし」と。だけど、決しておいしくないですよ。一生懸命に調理の人は作りますけど、運ぶのに時間がかかるし、家で食べるような温かいご飯が食べられるわけではないのです。だけどクニさんは、「ここでいいだけのご飯は天下第一品ですわ」と言うのです。全然、リハビリテーションをしない彼は、「先生様、見て下さい、リハビリテーションの成果があつて、こんなによくになりました」と言うような人でした。

リハビリテーションルームから離れる時、同僚の人に言っている言葉で印象的なことがあります。「ここにおつたらな、年金はもらえるしな、障害者になつてよかつたんやわ。嫌な仕事せんでいいしな。障害者年金を、お上からももらえるし、ご飯の心配せんでいいんやわ」。出会った時に年齢は上がつていたと思いますが、「このまま施設を転々として老人ホームに入れば、

俺の人生安泰なんやわ」という言い方をしました。僕がいない時に、同僚の人と話しているのはそういうことです。「ここでこんなふうにして言うことさえ聞いていたら、これほどいいところははないんや」と言います。

クニさんから僕が学んだこと、そして彼について印象に残ったことで、彼と僕の中で関係を結ぶ言葉は、「開き直り」という言葉ではないかと思えます。開き直ったクニさんです。「障害を持ってよかったわ」と言うクニさん。タケさんからはそんな言葉は聞かれませんでした。タケさんは後ろばかり、「障害者にならなかつたら、兄貴と会社が起こせて、これから俺の人生は順風満帆の人生だったのに、うしなってしまうって障害者になって辛い、諦めきれない」と言っていたように思います。一方のクニさんは、「障害者になってよかった。働けなくてよかった」と言うのです。奥さんがいたのですが、彼が障害者になって介護に疲れて、出ていってしまいました。そのことも彼は、「口うるさいカミサンが出ていってよかった」と言うのです。クニさんは、開き直って「それでよかった。うしなってよかった」という言い方をしました。それでよかったかどうかに関してですが、僕がクニさんと離れて、今、あたためていることは、彼は本当には開き直れてなかったのではないかということです。彼の人生の中で、障害に

うしないし、こころ模様

あつて開き直るしかなかったと思いますが、開き直ってよかったのかなという疑問が僕の中でわかざるをえなかったのです。

四 三つの喪失から——うしなうということ

これで三つの喪失をお話ししました。最初は、佐賀枝さんの喪失。二番目は、タケさんの喪失。三番目はクニさんの喪失です。最初の佐賀枝さんの喪失は諦めることもできず、開き直ることもできず、うろろうろする佐賀枝さん。二番目のタケさんは、諦めてはみるものの、諦めきれない。クニさんは開き直るけど、でも開き直れない。

実は、僕が日頃考えているテーマは、このような、人が何かをうしなうこと、そして、そのうしなった人がどのようになり、そしてどうしていくかという問題なのです。僕が執拗に関心を持っているこの喪失ということについて、すこし考えておきたいと思います。

ところで皆さん、今の時代というのは、百点満点の価値観がはびこっていると思いませんか？ 僕が今、自分で課題にしてしているのは、家事分担です。家事分担が男性の生き延びる

唯一の道だと思っています。家事は女性の仕事という考え方は、僕の世代以降は通用しないと思います。例えば、僕は近くのスーパーマーケットによく行きます。スーパーマーケットというのは、どこでも、入口から入るとまず野菜があつて、向かいに果物があつて、それから、お豆腐とか油揚げとか納豆とかがあつて、突き当たりに鮮魚コーナーがあつて、さらにお肉売り場があります。どこへ行つても均一な気がします。

僕の世代は、リンゴを食べても、虫喰いのもの、歪なふぞろいのものがいっぱいありました。食べてみて、「あっ酸っぱい」というリンゴがありました。そういう時代に育ちました。今、スーパーマーケットに行くと、Lサイズ、LLサイズでびかびかにお化粧をしたリンゴが並んでいると思います。でも、何だか変だと思いませんか？ リンゴは自然にできるものですから、虫喰いがあつてあたりまえ、日陰に育つリンゴがあつてあたりまえなのに、今、大きく丸くてLサイズ、LLサイズでないのだめという、ふぞろいのリンゴが排除されていると思いませんか？ 実は、ふぞろいものを排除していく論理がどこかで働いていると思います。気になつて「ふぞろいのリンゴってどうなるの？」と聞いたら、僕の奥さんが「それはジュースになるのよ」と言いました。

うしないし、こころ模様

翻って考えてみますと、どうも今の社会は、百点満点で欠点のない、例えば、丸く赤く食べるとジュースーでおいしいリングゴしかOKがでないように作られていると思うのです。ふざろいの、何か欠けてしまった、うしなってしまうものが排除されている社会だと思いませんか？

僕のこころの中で、いつもどこことなく感じる不完全感が作られてしまったのは、小学校に入ってから大学を卒業するまでの、中間考査、期末考査という数多くのテストが要因ではなかったかという感じがするのです。教室の入口から先生がザラ半紙を持って教壇のところに来る姿が一番嫌いでした。もうやめて、という感じでした。毎回、「百点満点を基準にしながら評価されていきますよね。六十点取ると、「あと四十点足りないね」と言われ、七十点取ると、「あと三十点足りないね」と言われ、八十点をたまに取っても「よくがんばったね、でもあと二十点足りないね」と言われる。減多になかったですが、九十点取って意気揚々と帰ってくると、「もうちょっとがんばったら百点だったのに」と。いつも生きてきた中で、不完全感を抱きながら、何か足りないという思いの中で人格形成をしてしまったような気がします。

その僕が、うしなうことに対して、だめなんじゃないかと思っただけのはあたりまえのような気

がします。みなさんは、どうですか？ タケさん、クニさんの話を聞いて、うしなうことって損すること、戻ってこないことだと思いますか？ 僕の中でうしなうことというのは、ずっと引き算の世界でしかなかったような気がします。そんな僕が福祉の仕事に就いて、仕事をするときは、障害を持った子供たちがんばれと励まし、がんばったら健全な人に近づけるような言い方をしながら、接していたような気がします。また、障害を持った人と接する時には、どこか健常者を百点満点に見立てて、障害を持った人を減点対象に考えていたような気がします。僕たちが持っている価値観で福祉は実現しないような気がします。そのような価値観をもって、福祉現場で障害を持っている人に出会ったりしても、減点でしか見られないのではないかかと思えます。僕たちの中に完全に出来上がってしまった合理的なものの見方では、うしなうたものというの、戻ってこないですね。でも、そのところが、今日の僕の話の一つの出発点です。うしなうて、それで終わりじゃないものを探してみたいと思います。僕がささやかに求めているのは、うしなうて、それで終わりじゃないものを探してみたいということです。

うしないし、こころ模様

五 先覚者九条武子に学ぶ

そこで、もう一人紹介してみたいと思います。九条武子（明治二〇年（一八八七）―昭和三年（一九二八））という方についてです。

武子さんは西本願寺の深窓の堀の奥で生まれ育ちました。武子さんのお父さんは大谷光尊（嘉永三年（一八五〇）―明治三六年（一九〇三））という人で、西本願寺の二十一代目の門主です。光尊さんがどういう時代に生きたかといいますと、幕末から明治時代ですから、廃仏毀釈が激しかったのです。それはある意味で仏教弾圧だったような気がします。統廃合の名のもとに、寺院が次々と壊されていきました。その時、マンモス教団のリーダーですから、随分心労もあつたと思われます。そのこともあつてか五十歳で亡くなります。その時に、武子さんは最初の喪失体験をします。

武子さんは佐佐木信綱という著名な詩人に師事して短歌を学び、歌を詠みますが、お父さんとの別れの悲しいこころをいっぱい歌に残しています。その時の歌は、あんなにも大事にして

くれた父親が亡くなって悲しいということです。今、僕が思っている悲しさ、皆さんが思っている悲しさとそんなに変わりません。

また、武子さんのお兄さんは大谷光瑞（明治九年（一八七六）―昭和三年（一九四八））という方で、大谷探検隊を編成しインドとかチベットに行つて、遺跡の発掘調査や仏典研究のための踏査をした人です。しかし、西本願寺の財政が傾くぐらいに、お金を湯水のように使つたために、後に光瑞さんが二十二代の門主になるのですが、一番短い在位期間で退位しました。他にも、日本の文化財をたくさん残したということでも有名な人です。例えば今も東京にある築地本願寺の建物は、インド風、ヨーロッパ風をミックスした建物で、光瑞さんの手によつて建てられました。とても知的な人だったことが偲べれます。

武子さんは、当時の男爵九条良致に、明治四十二年九月、二十二歳の時に嫁ぎました。十二月には、武子さんは、夫九条良致とともにヨーロッパに渡ります。また、お兄さんの光瑞が神戸港からインドを経由してそのままロンドンに行くのですが、ロンドンでお兄さん夫婦と武子さん夫婦が一緒に過ごします。そこで夫良致との不仲が囁かれます。ロンドンのケンジントンで一緒に生活するはずだったのですが、夫と武子は別々のアパートで暮したようです。

うしないし、こころ模様

ところで、光瑞さんの妻籬子さんは、その頃、西本願寺の命を受けて、日本で初めて仏教主義の女子大学を作るべくイギリスで宗教教育を視察していました。その時に武子も同伴するのです。一年間、ケンジントンで生活して、夫の良致はそのままケンジントンに残り、ケンブリッジ大学に留学します。武子さんは日本に戻り、籬子さんは女子大学を作るべく奔走している間に、産褥熱でなくなってしまう。その際、武子さんに懇願して、どうか女子大学創立の夢を叶えて下さいということで実現したのが、五条坂のところにある京都女子大学です。九条武子が創立者となっています。

武子さんは、十年夫良致を待ち続けます。その間に、彼女は歌をたくさん詠みます。朝霞を見て、遠いところにいる良致さんがいるはずなのに、私のもとに戻ってこないというものです。そんなつらさをいっばい歌にうたいます。そのような歌を「金鈴」として歌集にすると爆発的に売れました。そこまでの武子さんは深窓のお姫様です。退屈されるとお付きの人が来て、緋毛氈ひげんに座って武子さんと歌を詠んだりするのです。そして、大正九年、武子さんが三十三歳の時に夫が戻ってきて、築地本願寺で小康を得て生活します。

それから大正十二年九月一日、武子さんは、三十五歳の時に関東大震災の直撃に会い、すべ

てのものを焼失します。この関東大震災で武子さんが大転身していきます。そこを少しお話し
たいわけです。

九月一日に震災に直撃し、一週間後の八日に第一便を出しています。兵庫の小西酒造の奥さ
んに手紙を出しています。第一便は冷静に、「大変な震災に会いましたが、私は無事でいま
からご安心下さいませ」と。第二便として、九月十四日に手紙を出しています。その中で、
「もうあれから十日あまりたちますのに、暑いのか寒いのかもわかりませず、ここがどこやら
かわかりませず」という文章をちりばめた手紙を出しています。すごい喪失体験に出会った人
は、場所とか時間とかをうしなうようです。大切な人を病院でうしなって、その人が家までの
道中、どこを歩いて、何をしたのかわかりませんとという報告を聞いたりすることがあります。

武子さんは、今がいつなのやらわかりませんとという手紙を出しているのです。その手紙の文
面から、ショック期で見当識をうしなった時期があつたのだろうということが推測できます。
そして、九月二十四日付けの三通目。これは、字数を数えると四千字にもなります。その手紙
の中では、悲嘆、これ以上悲しみが無いというようなことを訴えています。また、ロンドンで
良致が買ってくれた指輪の金属が焼け跡から出てきて、それを見てはハラハラと泣いていると

うしないし、こころ模様

か、市松人形の針金が出てきまして、ああ、悲しゅうございますと、悲嘆をずっと綴っています。

カウンセリングをしていて、僕がしないといけないのは、そういう便箋みたいな役目なのかと思います。「あなたそう思うけど、この人と比較してこうよ」と言うと、クライアントさんは、「いやいや、私の方が大変よ」と弁解することがあります。カウンセリングの中で、とても大変な状態に出会った人が、一旦、時間をうしない、悲嘆のすべてをあますところなく訴えて、立ち上がっていくプロセスが、あの四千字の中にはあるような気がします。

その中で、武子さんはこういう言葉を一つ残します。「私は甦って生きてみたい」と書きます。「関東大震災に出遭って、私が生きてきた物質をすべてうしないました。うしないた中で、私これから甦って生きてみたいんです」と。緋毛毬で市松人形と遊んでいたような彼女が、こうして今度は救済事業を起こしていくのです。武子さんは震災の焼け跡に残って、テントを二つ建てます。一つのテントは怪我をした人の救護用のテントです。それが今、東京と京都にあるアソカ病院の前身です。もう一つは六華園という養護施設になります。救済事業をその後亡くなるまで続け、昭和三年、四十一歳の時に、過労で死んでしまいます。

彼女は震災で喪失して、手紙の中で七転八倒、悲嘆を述べ、思いのたけを手紙にぶつけて、その中で立ち上がっていったのです。その中で何か見えたんだらうと思います。「うしなって、何か初めて見えたものがあつた」のではないかと思うのです。書簡集を見てみると、九月一日、朝十一時半に第一震が東海沖で起きます。築地本願寺の本堂が焼け落ちるのが夜九時頃です。彼女は、焼け落ちていく大きな伽藍を見ながら、こんなことを書き残しています。

絶対に焼け落ちたり、壊れないだろうと思っていた本堂の垂木、本堂の大屋根、大屋根が猛火に焼かれて本堂の瓦が空中を舞うように、舞った瓦が一瞬にして落ちた時に、星が見えましました。真つ暗な空に星が。星は輝いていたんでしょけど本堂の建物があつて、私には見えなかつたんでしょ。

あ、そうかなと僕は思ったんです。伽藍が焼けるまでは、星が輝いていたのが見えなかつたのです。すごい勢いで舞い上がる炎の中で、本堂が一瞬にしてガサッと落ちた時に、それまで見えなかつた満天の星が輝いていたのに気づくのです。つまり、武子さんはうしなって初めて、いつも輝いていた星を見たのです。

それからもう一つ。彼女が震災の救援活動をしていく中で、永代橋の惨事が、起こります。

うしないし、こころ模様

永代橋という大きい橋があったのですが、仮設の橋でした。そのことを知らずに、震災で逃げまどった被災者が群れをなして橋の上にドッと押し寄せてきたのです。何が惨事を起こしたかというと、永代橋は潮の満ち引きのために、水面に高低差がある川に架かっていたのですが、たまたま落ちたのが満潮時だったために一瞬にして大量の人が亡くなってしまったのです。

十月くらいに、武子が救援活動をしながら永代橋のところを通りますと、震災後、一か月も経ったのに、まだ死体を上げている潜水夫の泡を見ます。その頃に、彼女の文章の中に綴られているのは、「逝く者は逝きなさい」という言葉でした。その文章に出会うまでは、僕は、寿命を全うして亡くなっていく人はいいけど、事故で亡くなっていく人は不憫じゃないかと思ってました。武子さんが、言葉では尽くせませんが、伝えたかったのは、生命は永遠ではなく、なくなっていくものだ、ということではなかったかと思えます。

三つ目は、武子さんは、築地本願寺が倒壊した後、バラック小屋の医療施設で寝起きをしたのですが、その時の文章についてです。彼女が、上野公園に建てたテントの病院に救援物資を届けに行く道中、真っ黒に焼けただけだれた関東大震災の焼け跡、黒い世界を見ているわけですから、焼け跡の黒い世界を想像してみてください。僕も家が焼けた時は、漬物の臭いにおとか、水を被った

衣類の臭いとか、異臭が漂って耐えられない臭いがしました。武子さんはそのような臭くて、真つ暗闇の世界の中で何を見たかと言いますと、十月半ばの書簡の中で、「真つ黒の世界の中で、白萩の花と芙蓉の花が咲いてございます」と綴っているのです。

その文章を読んだ時に、こういうことかなと思いました。恒久に崩れないと思った本堂が震災の火災で消失して、音もなく空中に瓦が舞って、本堂の垂木が落ちた時に武子さんは、「満天の星が見えました」と。うしななって見えたものは満点の星だったのです。もう一つは、永代橋で心澄まして見えたものは、「逝く者は逝きなさい」ということです。亡くなる者は亡くなりなさい。そして、震災の真つ黒の世界の中に、白萩がポツと咲いて芙蓉の花が咲いていると。：。関東大震災ですべてをうしななって、はじめたのが救済活動でした。今思うと、それまでの彼女は、ベクトルの方向をいつも自分に向けていたのです。私の大事なお父さんが亡くなり悲しい。私の大事な夫が十年間、戻りませずと言いつづけていたのです。「私が私」と言い続けます。三十五年間の彼女の人生はままならないと表現していいと思います。「人生ままなりませず」と。ところが、彼女が三十五歳の時に震災ですべてをうしななって、「あるがままの人生でございます」と転換できたのではないかと思えます。三十五歳までは、ままならない人生だ

うしないし、こころ模様

ったのが、そこですべてをうしなって、あるがままの人生を受け入れていくことができたのです。

おわりに

はじめに僕の喪失体験をお話ししました。それから、諦めきれないイナセなタケさん。そして、開き直ったように見せていて開き直れなかったクニさんのお話をしました。そこで最後に、もう一度皆さんと一緒に考えたいのは、人生のなかでうしなってしまうて、じゃあどうするかということですよ。

人生は過去、現在、未来とあるとすると、諦めようとしていたタケさんは過去ばかり見ていたわけです。クニさんは障害者になってよかったんや、年金で暮らせると開き直って先々ばかりの未来だけを見ていたのです。武子さんは、「過去はうしなってもいいんです、先々は心配しないでおきましょう。あるがままの人生としての今を生きましょう」ということを言い残してくれたような気がします。

僕は、そのような、あるがままを生きるという生き方を追い求めてみたいと思って、生きています。よく切れる包丁があったら、僕は過去を断ち切って、未来の先々の心配を断ち切って、今を一生懸命に生きてみようと思います。

僕は、いつも何か居場所がなくて、こうすれば居場所ができるのではないか、がんばったら誰かが居場所を作ってくれるんじゃないかとずっと思つて生きてきました。タケさんとクニさんは、中途障害者になって以降は人生が空白じゃないかと思つています。障害に出会うまでは生きていたけども障害を得てからは生きていないように思います。

あるがままの人生を生きてみたいと思うのです。うしなつて、諦めようか、でも諦めきれない。うしなつて、開き直るしかないみたいな、でも納得できません。「うしなうこと」はなげればなげに越したことはありませんが、人生の中で、もし僕たちがそういうチャンネルを持つことができるのであれば、うしなつておしまいじゃないかということ、佐賀枝さんは言っていたと覚えておいて下さい。うしなうことがもしあるとすれば、うしなつておしまいじゃない、諦めないでほしい、開き直らないでほしいということ、うしなつたことの事実を見ることによって、どれだけかの勇気がもらえると思います。タケさんもクニさんも事実を見なかつたん

うしないし、こころ模様

です。自分が障害を持ったことを見ようとしなかったのです。それは過去の栄光を見ることによつて、忌まわしい障害を持った今の自分を見なくてすむからです。

今、僕がみなさんに伝えたいことは、ちよつとの勇氣を持つて、事実を見てもらえたらいいな、ということですよ。これはささやかな佐賀枝さんからの提言です。みなさんはいろいろなことに会おうと思います。もし、いろんなことに会つた時には、そうじゃなければよかったのに、ままならない人生だからと逃げないで下さい。「悩みを見つめて」ということは悩みから逃げないことです。見てみることや、味わつてみることです。そういうことが大事なことのよな気がします。それが今日の話で僕がみなさんにお伝えしたかったことです。ありがとうございます。

——一九九七・十・二八——